

ハンドリング処理による黒毛和種子牛の対人反応に及ぼす影響

畜産試験場

檜垣 邦昭

黒毛和種子牛は、一般的に離乳まで親子同居で飼育されることから、人に対して馴れにくいとされている。しかし、生後初期に様々な処理を行うことによって、牛や豚で対人反応が改善されると報告されている。そこで、黒毛和種子牛に対する生後5日間のハンドリング処理が対人反応に及ぼす影響を調査した。場内生産子牛を3区に分け、対照区、分娩直後親子分離し人工哺乳を行った人工哺乳区、生後5日間朝夕各5分間のハンドリング処理を行った処理区とした。毎月の体測時に捕獲時行動スコアおよび血中コルチゾール濃度を測定した。行動スコアは、5（非常に馴れていない）～1（非常に馴れている）で評価した。行動スコアは処理区が対照区と比較して低い傾向を示したが有意差は認められなかった。血中コルチゾール濃度は各区間、月齢間において有意差は認められなかった。これらのことから、ハンドリング処理によって、その後の対人反応が改善される傾向を示すことが明らかになった。

畜種：牛、分類：畜産技術